

---

# ワープマシン

脳好き人間

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ワープマシン

【Nコード】  
N7007Y

【作者名】  
脳好き人間

【あらすじ】  
『ワープマシン』のせいで、一人の研究者が娘のことを思い、悩んだりする話。

世の中は疑問で満ちています。

時代は進歩した。人は食事をしなくても機械を装着するだけで生きていけるようになったし、『ワープマシン』が出来てからは好きな場所にいつでも行けるようになった。

まあ、その『ワープマシン』を開発したのは自分なのだがな。自慢ではないが、今では携帯電話と同じくらいに普及している。

「おとーさん、私もわーぷしたいよ。かいはつしゃであるおとーさんの娘が一回もわーぷしてないなんて、論理的におかしいよ」

娘の声で、我にかえった。しまった、また考え事をしてしまっていたな。いけないいけない、今は夕食時ではないか。久しぶりに帰宅したから気がつかなかったが、我が家は機械をあまり使わないのをルールにしており、食事を摂取するのだった。

それにしても論理的に、か。この子がもっと小さかった頃、事故で死んでしまった妻の口癖も、論理的に、だったな。

この子が初めて言った言葉も論理的、だったのには驚いたが。他の言葉を喋るようになるまで、笑いを堪えるのが大変だった。

「ちょっとおとーさん、聞いてるの？ いや、聞いてない。研究者である私にはわかるのだ」

「済まない、考え事をしていた。もう一度言ってくれ」

「かいはつしゃの娘がわーぷしたことないのは、論理的におかしいって言ったの。私もわーぷしたいの！」

ああ、そういう話だったな。しかし、ワープか。

「ワープは駄目だ。理由はお前が大きくなったら教える。それまでは我慢してくれ。頼む」

なるべく誠意をこめて頼むと、不満そうにしつつも引き下がってくれた。流石は自慢の娘だ。

「おとーさん、じゃあ、一つだけ質問してもよいだろうか？」

「ああ、いいぞ」

「どーして大きくなるまで教えてくれないの？簡潔に述べてください」

「……………済まない。だから、大きくなるまで待つてくれ。そうだが、お前の好きなお菓子おもちゃを買ってこよう」

そう言い、足早にその場から立ち去った。

研究者である自分も家ではただの父親だ。娘に嫌われたくはない。よって、理由を説明することは出来ないのだ。

人一人いない道を歩いていると改めて実感する。皆が『ワープマシン』を使い、わざわざ自らの足で移動する人はいなくなってしまうのだと。

コンビン二に着くと、風船飴と書かれているプレートを押し、カードをかざした。これで、家に商品が届いていることだろう。

「も、もしかして貴方は、あの『ワープマシン』を開発した方じゃありませんか？」

知らない人に話し掛けられた。まあ、自分のことを知っているのなら、この人も同業者なのだろう。

「そうですが、何か？」

「や、やっぱりそうですか。あ、あの、ずっと『ワープマシン』の開発者さんに聞きたいと思ってたことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

「いいですよ」

研究者である自分も、人の子だ。こんなに目を輝かせている人の頼みを断るのは難しい。

「やった！……ええと、『ワープマシン』の横に付いている箱みたいな物、何が入ってるんです？」

「……材料だよ」

「材料？……ああ、なるほど」

「君は、生まれてからどれだけの時間を生きている？」

「は？……二十年くらい、ですけど」

ふん。二十年くらい、か。

「君、長生きしたいのなら、たまには徒歩で移動するべきだ。自分は徒歩で帰る。では」

絶対に一歳未満である若者に別れを告げ、立ち去った。

皆、自分が開発してしまった『ワープマシン』がどういう仕組みなのかを理解しているはずなのに、平気で使う。自分には全く理解できないことだ。

昔冗談半分で作った『遠距離人間コピー機』が、まさか『ワープマシン』として普及するとは。想定外だった。

人間の隅々までを完璧にスキャンし、データを送る。スキャンした物、いや者をデータ転送先で組み上げる。それが、自分の作った『遠距離人間コピー機』だ。

もつとも、それを商品化することなど少しも考えておらず、それを上司に見せた目的は、自分の実力を知ってもらったことだったのだ。

なにしろ、人間をスキャン出来る程の光線を浴びるのだから、使用した人間は細胞がズタズタになる。つまり、死ぬのだ。

そもそも人間のクローンを作るのは世界共通のタブーだ。本当に実用化されるなんて思うはずがない。

しかし、いつの間にか『遠距離人間コピー機』は、『ワープマシン』として発売されていた。

今までの記憶もそのままの自分が転送先にいるなら、ワープしたのと同じこと、だそうだ。

恐ろしいことにそれが人類の一般的な考えらしい。

……ふう、そろそろ家に着くな。娘はあのお菓子を喜んでくれているだろうか？

家に帰る度に疑問に思う。自分は、あんな残酷な『ワープマシン』を開発したことを知られ、娘に嫌われてしまうことを恐れているのだろうか？

それとも、知られたうえで、娘が『一般的』な考えを述べてくる  
という可能性を恐れているのだろうか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7007y/>

---

ワーブマシン

2011年11月21日06時54分発行